要　旨

多義動詞「つながる」の意味分析

――「因果関係用法」に注目したその通時変化及び特徴の考察――

9N14007
辛　　蒙

本論では、例文「金の供給量の減少は金の価格の上昇につながるのである。」のような「つながる」の意味用法を因果関係用法とする。その用法に関して、どの用法から発生してきたのか、その発生時期及び特徴を明らかにすることを目的として、以下のことを行った。

(1) 多義動詞「つながる」の多義構造の分析
(2) コーパスを利用した、その発生時期の検証
(3) 因果関係用法の特徴の考察
(4) 対応する他動詞「つなげる」との対照

(1) については、「つながる」の意味用法を 15 種類に分け、因果関係用法と比較的に近い用法を見出し、その共通点と相違点を考察した。比較的に近い【意味用法 14】(事柄同士の相互関係) は「地域福祉は、住民の生活と直接つながっている領域として、社会福祉分野がその他の分野の動向に規定され影響されるパイプになっている。」のようなものである。【意味 14】と【意味 15】(因果関係用法) との共通点は、両者ともが事柄同士の関係を示していることである。【意味 14】には時間的の前後順序がない、その一方で因果関係用法において、事柄同士の間に時間的の前後順序が存在する。【意味 14】から【意味 15】へ向かい、「つながる」には時間的の要素が加わっている。

(2) については、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『青空文庫』、『神戸大学新

聞記事文庫』と『国会会議録（予算委員会)』を利用し、その年代変化を考察した。結果としては、1931 年に因果関係用法の早い用例が見られ、1970 年代以来活発に使われていることを明らかにした。

⑶ について、について、因果関係用法の格体制は、〔ガ，ニ／へ／ヘト〕が典型的であり、非対称性用法しかない。因果関係用法は、推量・蓋然性を表す文末表現と共起するが、これは【意味 2】を除き、他の用法では見られない。最後に、「つながる」の持つ因果関係用法は直接的ではなく、様々なプロセスを経て最終的に後件の事態に至ることを表している。

⑷ 自動詞「つながる」と他動詞「つなげる」には、意味の対応があり、因果関係用法もある。他動詞「つなげる」の因果関係用法の格体制は、基本的に〈ガ、ヲ、ニ〉である。「つながる」との相違点は、「つながる」の場合は、ある事柄の影響で、ある結果が自然に出てくるのに対して、「つなげる」では、動作主の意図が感じられる。

今後の課題としては、因果関係用法の発生と関連していると思われる【意味 14】（事柄同士の関係）の発生年代を調べること、また、「むすびつく」など類義語との比較等を行いたい。